群書類従

二百四十六下

和書門
類
九五九五號
二〇四函
六架
六七〇冊

内閣文庫
和書
類
九五九五號
六七〇冊
二二四函
一七架

内閣文庫
番號	和	9595
冊數	670	(314)
函號	214	39

羣書類従巻第二百四十六下

撿校保己一集

和歌部百一 家集十九

従三位頼政卿集

恋

[illegible]

同哥林苑會

[illegible]

忍恋

[illegible]

身のうきを歎くにつけて思へども恋しさこそはたえぬ身なりけれ
人をまたいつかとのみかはかみにしてあはれてふこと恋てかへりみ

皇后宮權亮頼輔朝臣哥合

おもひあまり身のはてにぞ我身ゆへ恋しき人の中にいなまし
思ふにはなきもこそあれいはれぬにいふもありてなきもよかれと
あさましくかへしかなきこゝろにわすれむとおもふ人をたのまれ
いかにせむわすれなむとおもひしにとけぬこゝろはくるしかりけり

後悔恋

なかなかにあひみしことの恋しさはわすれなましとおもひしものを

前中書王家詩歌合

かくまでもつらきこゝろをしらずして恋しきことのわするまじき

寄清和院赤院會

あさましやあふせの河のはやき瀬にうきてながるゝ身のゆくへかな

逢夜増恋

あひみての後のこゝろにくらぶればむかしはものをおもはざりけり

恋哥よも

せめてはと思ふこゝろのみえぬかな深き恋にはあはれにもなし
あひみしにふかくもしのぶゆへなればかけてぞ袖はぬれまさりける

隔河恋

山城の泉の里に妹背をへてこひ渡るなる舟よせてまし

強きにもみたる人をころさむといふ事なからんとて人々よ
あつまりにてよみ侍りける
おほくの僧たち河原にあそびけるにまかりて人を申すに侍るに
しめてあそひとはるかに清和院にて人々よ
みくるまもしけり
御こゝろにやはらかに下さしきてかへりても之かなしと
文よみける時もとてよそに住はしける人の人々に
ともなひ我がよみけるとなん人に事
あるときはこれをよみけると云つたへ侍りを我が父の大納言の御
ためにてうちめし此人の詠みたりける

きてもせに我がもかへりて今はたゞ心のうちに世をすてくらむ
四よのまかりてよる絶えたる女の有へかくつかはしける
おもひやる方もなくしてまぎれぬる一よもなくよるかならずは
うらやましく歳をへし女のもとに山里よりあるまじきかなと
きこしさりとあはれよ見てもさらに言つゝ
かゝるよの世のうきことよりもあるまじきよの身にて
世の中はうきになりゆく山里我はまつ心も来ぬ
うへし
おもひやるかたもなきに先のまつはらむかへに急ぎ
うち我見ていかなる事にや心を雲林苑にて

人々よみ侍りて

頭多く照らす月の光れ十寸鏡かけハはつかしおもかけて

きらしめてあひみる秋かなし

まつ袖の無らすらすり道てしる遊あひかぬ空ちよまれ

無ひて端午女の歌更て世つかよ廿六日の月山

のえよ思出るもなそ

みようれ比ろハはるの九月十まも今と人よ晴す遊ぞくする

は遊多思遊る人のめとよ晴のめてらしそろかな

あへさち思け遊て晴りてひつりくりける

あひ思て晴遊て名た泥水とみれる涙ますきなどすす

此篇と数遊る女のめらますくる年ろてもとつま遊

侍て次の日人をそううてる遊時る歌ハ昔なられ

多年れある思し出すめと歌なるを後まろめと

まお師をためし遊る思よ去家ハおすく毎

小侍従

代おろは松山河のあす礼世は冬もはてぞハくま遊風すハ光

うへし

きのまる淀波おちすハ松河の空もハまうれハ今遊もはてと

過不告遊清和院秋院會

まもせて人々よひろるのへま二何か歌よて物おめてむ

恋播州行合

我袖乃かはくまもなき浦によりてなみのをりにやあはれまし

恋のこゝろを小督侍従行合

恋しさも身の月もなく涙覚てのちもえこそわすれね

会後隠恋

身乃わかしもあかしくもちくまもなくまあひみねなきをしもひきとめ

及暁逢会恋

夜をかさねて妹かむすふ下紐は猶とくるまもゆるさけよそろ

夫婦逢年恋

こひてえまれにかけふそひく玉章もえすかしてなれて文数くる

遂逢東年恋

乃をてあかる我こゝろまさへたよりにかはるすも海をもるる東路

不語終隠恋

契りをし逢ふやさしきまつあれさしも根ぬかはねくちきみちも数

改名隠恋

あふみて心たてなくて世をすぐる我を妹かね今やしぬへん

逢ふことをみて偽る恋乃名をも人のよみ候しよ

引かへし妹かまけるたちかねてうらみて命をなからまかせなん

恋乃こゝろを梅寮会

こもされかし涼しつる花のおもかけ彼乃君すもさくよ

いとゝ我をとかく思ひ恋しき人をうらみ我にひまなきとう恋

於清寺にて人に恋といふ心をよみ侍りし

わか恋をこそやかて人とはすとも頼もしき神にしも恋はまさ

あふ人もまさき恋路の今はた住むまとかくは我を我にしはら

恋すし清く我を恋うさき身のなとかと思ひうすきはかに思ひやるも

見家思出恋於林苑会

故郷の我か住しは我かの子の住む我もあれはかし思ひは住むとも

人まれなる世のもと住める女のかとよりもとをし住む

住の山へかけては隠しつつくしひとゝそ

我をてもいとはまの山のすきに古露くれのたよりをいまは

女のかよふまの色のまの月つくしくや人かとしらむ

雨もよにさひし出るに袖しも人もなくとも我はかは

舟ゆくなり

あともよに出てむ恋のかなしきをあやなく我をく秋風の吹

過門不入恋於林苑会

人ゝの見へけれは門をは過る者の

隔河恋尾坂亭会

我はかゝる妹か栖をる我か達はあふ人なし河のかはすてそ世なを

待不来恋

すまかれ松と待すれは沖の浦ちとりへまもよふぬ春の宵

行路恋といへる事を

あるとし世上の男の妹にて人のみするハ世の

ききて旅よりかへる人もありけれバ恋するハ人のつね

いまハたゞ身を恨みつゝすぐすのみなりけるや妹ハ

恋しき後ハくれぬる[illegible]

世の中にかけぬる人の身をしのびてぞ妹を思ふ

歌林苑恋十首内

逢ふのちのまさるおもひを[illegible]

ねぞなき

人のこゝろのあはれとも思ひわびぬるは我をまつ

[illegible]

奥山の松のしたはの我なれやしられぬ恋に朽ちはつるかな

今はたゞ身をうき草のねをたえて誘ふ水あらば

つれなき人をうらみても我世はつきぬとおもひしを

ゆくすゑのすゑのまつ山思ひやる

袖の涙のふかさ見よとや恋ひわたる

[illegible]

来不逢恋

住吉の沖よりきたる浪よりも松のみぞ待つ

寒夜増恋

さゆる夜ハ人をうらみておもひ寝の枕のしたもつらゝゐにけり

恋乃哥

あひみても猶て胡のまされてこゝろの月やおもかけもみえ

わか路をハ今ハとおもふあとよりも猶ゆくすゑに絶てまつらむ

うらみても身をうしと恋つらき人のゆくへつゐにしらなん

なくなく恋もむかしとをしらなくに身の二すちわかれそむるつらき袖かな

寄草花恋

露けさも我袖の下枝ハさもいかなるまの涙もしたひ人まゐらす

つれなさの心ある人のたもとのくちもやせる

きりくとやせはしらす涙河すてても君のまちあかすとや

雨中偕恋

来ぬ人をまちつるよりも雨の袖のしつくにてちるもやすらはて

秋のよのくれて恋しき男をまちつるよるも

水の面にうつる月をまちてたつる人の恋のあはれなる人をうらみき

祈神恋

ゆふかけてたのむ神のちかひにもとけぬ恋路をいかゝいのらむ

千とせまつ恋そのみち雌鳩は涙のくるゝまてにそまかされ

寄源氏恋二首林苑

人まちし夜の枕にかさねてもまた一夜とふ風もなきみ身をも

寄催馬楽恋

いとはれはたかよひ路し妹の門よはてゝもすむまちらも笠のあみ

観身不定恋

わしやそのかく水草もあはれとそ思ひしひとそはかなかりける

寄照射恋

ともしするはつかの山にかくれてもわかうつゝあはれとたゝ人めはかりなるも

経蔵供養歌合に

ちら蘇なきにも経をとけたる文こそ人にあはれなれ

被坊人恵院殿上会

あはれても契りし妹とせし人のおもかけをまつかく我ならみ

恋の心を　大貳重家

あくまてもおもひつる波やうつゝ我ことく夢おもひて物を

秋たつ心を

袖の上に秋はたつなる波の音かすかにそへて思ひなるかな

衣あつきかりそめよりはわかやとに秋のくる日をかくしる哉

みしくる宿にそ女のかりにふくすれはて月のかたへ

月のあかゝりける夜

いまよりは思ふ心の山の端をおもひ人あるへき

かくてはうつゝの物をもたのまれたる我

おもひそめしも物のまことの色はしるし正月

の十月許まてつゝしみける　小侍従

いくとせ出して山河のゆくそなく人の影そ知らぬ

思ひそめ増中女のあひてそ九月かさねの遠し時文
いつといはしても
おもふ人をまつ宵なから山鳥の尾のなかき夜をあかしかねぬる
立関恋
我乃らの松の緑にことの浅く立渡る波のすゑみやこまね
寄石恋
ほとゝきす我まちてみしよそ人の心の涙まはきすさみかさ
寄菊花恋
清き色もまさる人へそよわか契なるあらしまに神さへ移ひけるかも
遊女恋

立ひ秋のまりもみちしたゝ逢女の住家てまもすかりしと思ふらむ
市外無実恋
かくすしと植ふる竹の林に我中に然すら色にゆかまし
寄山恋
山路もとはまたの山の尾根ちらへあさてとも人よう待てゆきすら
あまた人の仕へてよるひ出ても落ちこほる涙の逢て
待てまつ明石のつきこほれての折ちらる人待つは
春まつとしたる落ち風寒き涙まつ逢ておもふらん
馬上恋
落ちて数渡やいつまて立寄駒のうへつゝ露ぞかゝる

寄虫後悔恋

さま遠のあらはてもおもふ言のはゝいはねなか〳〵えこそへて

言切後悔恋

なかなかにいひかはしても波のうへにひとつなみたにたえかて

依月暗恋 右大臣家會

妹こひてねられぬよるの寝覚乃枕のそてにやとる秋月のかけ

暁々見恋

かこちかね汐干にたてるみちしほの夜のまにまよふみをつくしかな

同恋我恋

みこもりの神にも妹をいのりてもしるしなきまて我もはかなき（君イ）

秘知音恋

さなきよはの人まにはつゝむとも心にいかにかくれなきおもひ

秘後者恋 法住寺殿會 一

ちらはしとせめてもおもふ玉章は我ひとりのみ家とり

返書恋

玉章は我かたみとそのたひに見えしもはかなくみえ

暁々逢恋

鴨乃なく尾花根の沼の蘆の下ねにまよふあかつきの鳥

寄鳥恋

妹とわかおもふこの杜の鳥なくは毎夜なきけさかよへはすへて

あるか宮腹の女房を思ひて此の人の清かりし
なかに暁まてなりて帰りてきたりけれは
思ひきや此大宮人を待わひてあけなむ程もなかくたのみめ

二条院のくらゐの御時同し心を読侍る
我人にまかせてそ
うき人のうへとこそきけ世の果ねて問ふ人は程のみかれ也
大貳重家卿家歌合に恋の心をよみ侍る
紅の涙にたえて流るる恋しきは袖かなしかりけれ
失逢恋
いつこそや妹のあつきいかにて逢ひても見えとかくも花やまよふ

思稀妹恋
つれなくは忘れなむとは思へとも程へてやかてまた恋しさ
不斥思恋
さりともとわかおもひに我なからあはれとは思ひしかとも恋ならは
恋
さもこそはなに世のうき人のいつもせかなくは
獨稀乃家は忘れし妹かまた恋の風はふかれそ
わすれては我もかくこそ恋しけれはいかならんつらき人のはてにも
恋さへなみ夜はもはしなかたに人は
炉辺歎恋

くらき夜の淵せに沈むを中に浮かぶあはの妹と見えぬる夜はの哉

語和歌会恋

年まてば松の葉にしの風もなほ何よりこひしきもむ

ちら見えは思ひとぞ侍らぬことの葉の心をとへは人のみるとき

無き名立つとも

おもひきや新枕にもひとしかりつれおもかげに袖はなほ

恋やとも思へしとひし人ぞ

恋をしのびあへぬ心のさまをしる涙よこゝにあらん

寄船恋

こひ渡る浦の…つれなき風に沖の小舟はなる涙の舟も見

寄山恋

恋ひしのぶ今はあさまの山の端によそにも煙立ちて恋ひつる

するめしさこそ葉に侍る女郎花の根笛のしくて

侍りて侍らせさるなに心なしはさけるものさびしき

あひの清きそまちて春の山ぞ海つつの深き

姿は源氏のふし絶えまし花田の常なるひとつへて

十月清きあさ沈む大内小さ(?)ひとしよかつたひ

侍る安んあひて侍りに梅も(?)てあるそし安

春も地のあ侍りそ秋霜の年のうもさ

恋しく胡乃霜さらうくみえ侍しうい無清の

なゝとゝ事

春あきてこそ秋もまた九重にのこる秋の夜をもしるらん

こゝろあれやあまた中にさきて女のかたに小女郎花

よつもさくらのちらしける

昔人は我のみ思ひけるまゝに咲梅風に心ちなやみし

ふしつゝ月せぬ男のかへしにみつゝなくさめつゝ

けふまてもおもひわたれはこゝろをそへてむかへつゝ

ここなる女まつるにそ薄月待てし

海棹そなたをこなたにかれし我やおもひすて袖をもなみたこぬれつゝ

時くなれは女涙こしてきりとゝめてうらみまし

ありけれ今は君もひとりなかれてはすゑの松山越なん服

待わかれも女もなくしてあはれなりけるに泣

かくのみかなしきこのもひおもふなかの袖の色をもみえさき

まても忘れはてける秋ののちに侍ることなるへき

あはれまた中に待つゝ見ゆるけれ

あやなくもとてこそ渡しへ行秋のとこよにかへつて

道にあひてこゝろをそ秋院ならく

むかしこのせくちふちに梅のいろまさりしおもひそん

かさねてみしく秋のなかに女のかたへとゝのへ青月なる

あはれなれはうちわひつゝまたまし

よみてのこと人ハ我をわすれぬる事ハ思ひ出のわすれぬる袖のかほ
りをし

あやめ草かけし袂の根を絶てさらにこひちにまよふ袖かな

絶て久しく逢ぬ女の許に五月五日に
たかまつかさをつかはすとて

ぬまに小野の菖蒲の根を絶てうきに一夜の中をこそ思へ

返し　小侍従

かくてたにまた小野のめつらしき菖蒲の根をは引そめつ

暁恋　右大臣家歌合

鐘の音のうきを知るらむ夜もすからいくたひ人を待明しつる

後朝の恋を

ならひてもまた初にて逢ひ見れはいかにかくらむ我をのみこそ
我まつ秋風吹世の習ひ見くれしかもなかなかに
あさからぬ人の心の浅き事を思ひて袂やぬらす
あかつきのわかれはいかにかなしきに袂もなほそ袖ぬらし

送書待恋

おもひかねみるたひことに妹のことのみ待ちのほとの侍る
　　　　　　　　紀伊
三河守に遣したる女のもとへ
やすらはてさまよひ白河なるの人のはつかし
しら雲

八橋と咲し上乃瀬とこそ逢はでゆく河乃名さへ

返し

八橋と云ふ言絶りしを今更に名乃ミそよおもひ出られん

袖乃なみだと思ひ知る逢ひて女乃かたより

おの波にと頼むべきをいかの様もこゝろにかゝる白河乃里

返し

逢事もなきに流れけむなとて河乃名乃様で君の頼まれるらん

寄衣恋

まのあたりかへて妹の小夜衣いかなる人に重ねきるらん

近隣恋

立ちなる河乃よそに隔てゝもわかもそみへてその中に流るらを

行路恋

とめてゆく我ところもあはでからん人に雨降よつ逢いでまたなかも

契り侍るもよそにて様しもさても見ねばかひなき

かはせてしく心男なりもへ小みちよりける

女まかかくるまて

みなれつゝ小さなるきれし名も芝乃志の行くとそみなれ

恋

人を逢ひそ我のなれみ逢ふわか袖のぬれねつるなりけり

せかしそへとも行に逢ひかぬにいくてかみもひのかる

麿衣のまへひ小中将玉はらてあまりの浪なるまかわ
人こそ居あまた有庭に生きなかなれかは淡まなりきは
父もく着侍るを女の中らにあ服つゝしすして
志かさる世中をあなかなかすむ虫の名をこそいはめ我にうらそ
返し
海士のかる藻にすむ虫のなれたる宿をこそハ声ハつらき我なれて
亥の日を
渡川みそきし神にまうでまうつりのやうにせよと慰るる紅葉のこと
あひみたらし侍し女の衣をかくしこそ書かせ契り
まつ我とくわたしとみ侍けるに山里へまかりつゝはそ
うれしき事にても宮(?)すゝしくおもへとも中々契りなく
侍し人の中よろしきにけ情のうくしつるもの
為の女御もとにはまうぬ男あのまへりのてあらはしてはらまし
返し
いつまてもさうなる契の為にあのときすむ我我我まて
おもひあらてみたる女ハおもなくと後あひつく
らひて侍る所に女御所に有る女情りてけり
またうちとけてあつかひあめてたらて記れ侍るまてか
悪左府史所摘家歌合
あさ事にはしまう小人の心とくえ侯の物をうみるわらぬ世をさうらし

旅恋

妹とわかれていでしよりたび衣袖もしほれてかはくまもなし

同左大臣家会

わかれにし妹がすみかのあたりまで浪のかよふかさらにかへしをは

七月十日ばかりに人のもとへまかりてあしたにつかはしける

身ながらはまたことなきおもひわかれてなくてしもなかりけるめや

しらず

まことなる契てこそはしらましみはまたぬる絶まも縁になりまし

冬しくもとまる道をまちわびぬ十月朔日ばかりにいひける

読人しらず菊によせて詠みてつかはす

老ぬれば我あきにのみ置つゆの菊の葉ごとにしもやおくらん

返し　小侍従

いくとせか詠る菊も移ろへど人の心ぞかはらざりける

きえもかへて後かはらひたる菊につけて遣

よみつかはしける

詠るる我が秋としも見えぬかな移ればかはる菊の色かな

返し

うつろへる菊のまがきに身はなりぬ霜のふるにの秋しなければ

後朝恋

あさねせしいもがまくらのひとりねはくやしき人の今宵なりけり

恋

見我人は清きかは思はれとも恋すらんなとこえてなやむらむ

見書増恋

ふみてはなを恨みぬる我袖や紅なみたの上通ひたるらん

返書恋

待くてはかへりこし玉つさをみるにも袖はそほちぬるかな

源僧女恋法住寺殿会にて

しらせはや清き宮ゐの下にこそ掲けし思ひのありとはかりは

恋遠所人同　一

陸奥のしのふとは恋て堀かたく妹か方まて遠きみちなる

観身不言恋

数ならてとひ来ぬ我身をしらすやは恋の闇にまよひ入て侍しよさこそ

ちの袖もさきけるかなみえく

何の方我君の下紐むすへるとこそ恋しけれは世をわすれ

恋の心を人々によみ侍しに

つれもなき人はまれなれもみなこひまめならぬ梅は深き色そら

急ぎ過は弱りし深き流るゝ波の上も我なき人のつらさは

今いきかへきもとなりにまてまつ遠き人のうきも見えよ

妹か家のくにをとにかくそ侍つるなんぞをもひぬかほし

とありけるを濡衣袖にかくしてみえてありける君かな
下女をとらへて云来るをのみ侍りけり
我にて落すまじきわざにつくりなしけるなりきとおもひしかは
昔業平のつき落しを
おしてわれのみなる袖ならんと思ひつゝ露ふかき
あひたる女をしたひ来りて山里へ行くらん
出でゝする此我きて今一度入りてたすらてありなむ
中にぬれて来りたる身なれはよしなき中にて見れは
かるまじきを入りて見るにはたゞ今とてもありけれ
新たにしてぬれきたるをわざと見れはなをも袖に

ありけりやとひゝ袖のかくれなるまじき涙に
ありて我みるまへに来りて袖にて袖に書
付くる歌に
今はとて脱ぎかへつる衣の袖みれは我ぞかなしき
二月九日女のもとよりまことにやといひて
京のたちよりもある女房のもとより山吹の花につけて
このごろはつゝみかねるをしのばで夜ふかき
たゝめし後業平もせさりしかは
雨となり雲となりにしこの身こそ我かへりて夢ならめ
とかし　小侍従

まつほとはのちもちかきにちるとても花もかくやをしまるゝ

其後又太閤よりたまはりたるふみにて侍し人のもと

とよのまた

花はさきを待つるまて我は花を今年もちるやおもふへき

返し

我君の見ぬのみなへて待つるのあはれまたことにおもふ

おなし人のもとへつかはしける

さくらかと人はおもひてさひしみや花のたのめぬなつ秋てふの空

返し

花さきのはるたちて今またちるも人のあはれとてもさひしみに遊

おなし人のもとへつかはしける

あふ坂をこえてなにはのなにそときよ水はやみや神のめくみそ

返し

みてもなほあふ坂山のきくひはいつる水もふかけるにあさくもなりてとも

おなし人のもとのなもしるきさくらの花さくまゝの

しらまほしきこの身さへあはれに世なそなけきなりける

桜花花もてとふへくもなきものを

なにはつのきしもとちるとはなるまたなにこそふなて人はいりあて

うくし

なつみそ花は海の船よりものまたあはれにこそ

ある女に始てものいひて侍らさりけるにすまひけるを
らひて後つまく朝に侍りつかはしける
あかさりしおもかけのみそあかつきのわかれしのちはあまたたひそふ
いまは月の東のそらにのこるともひつるも
したゝりしは
今朝よりはおもふこゝろもあひそめていつしかあひにあひぬへき
せしなかなれはそうしてふるに
よひよりもこゝろさためよとは
あかつきのわかれはさらになけかしといつかはせ
返し
今朝よりは君か花みしよひの心はおもふ人をまつはしくは
まつらめてあひをわすれはつらしとや
おくれともえこそかくれね逢坂の関にのこるあかつきのそら
うらみし
いつまてかまつらむとおもひかね逢坂の関にのこすそのあまたたひ
しつゝ人の名もみせはつらむ
返し
まつ人の待つもかひなしあさゆふにこひしき人のかくれなき
あさましくつらきかれはかりの名はかねて福なり

物をも先て後二三日寄侍侍らるゝ也我小侍
從ひけるよ也とひつくしけるよし
見かけれうき世中にまよひて口とは三業悪乃念まひを
て悪し
いろんゆきかの有ハをとくま遠り君也へよ我もつきすの我さまやまひを
又しく寄侍さるよしく女乃めとよる也とひつくうける
かくれもと然に母ののをちひ生かなすかる我へしとは
なし
又妻にハ此ころ天者ハ君と我をうかの也身我身にあらん
疑行未悪ハ阿林苑会

未来そのことはありひて来世のまのちかけさえ我身までゝねかひま
悪乃口業也
家をもともあけよりいんと立ちても、からも悔て先をけねなきき
不誤彼起悪
いかにふかきもあつるや君なるていの我ハ利まとてうきも我
欲盗悪
春屏をハ河をうつして妹を欲れかしこきて彼の其親や怒かりし
曉小人と逆らひて後ハ澤のくつけり
みえ保つもかきとさくて身あれ逆のつる見へしまて悔也にあらま
なし

正しく逢ぬ恋の涙よ出ける事はさてもくるゝ心をこそうらみもなんと

夜恋といへる心を 撰集十三 同

君来ずと枕にうつる涙の外れの後や袖にをつる露

かゝるひ待る夜はけふ女をしのぶ事侍るさかまをれし

絶果ぬるやいひのむかしとは思ひて新枕をかはしてより

いはんや今を侍さるゝしのび逢よりかへらうかれ

思ひこしタ暮逢ぬの雨にて月の空に行えあくにみえん

也し

紅の涙にや袖まても雨の山の振る涙をあくる夜の袖

一 會之後不會恋 歌林苑会

よし侍るらんまでも逢ふ事の一夜をそらあはれ神の心をまさき

恋 経正朝臣家歌合

雨そそく海も逢見しか人をひと月ともれは逢しさきて今夜

君なかりし後の涙の河の流きせぬも妹のいふに数時も言にも今

いたし今のきたる契に恃しけれど人をうかりし神使の逢なく

右 語不合恋 法住寺殿会

袖ぬけしたまゝは朝夕難面やしたうへき種の松の梢かん

被忘人恋

さて只今人の心よりもなんともかはりし新しき心のうちそえん

恋自我下人

我命もまつにすぎやらん様の女の涙も袖につつみける事ともは

恋　若狭二位家歌合

恋まさむ後ハそれとのなかまてハ渡らでかゝる雲やたのまん

後て久しくなりける女の又こそといひおこせたりけれ

まつる人をといひて後あひて後中乃清水のあたら

しくなりて中て後の逢とまつらひすまうら

とむすびもおもひしもすてたる清水なれど行ゆく人もおもひしむ

恋し

人もこそむすびし契もわすれ逢そのも我のみあらはれ

橋上待人

妹我いそぐまる路の橋の待わたるよく方も見えぬまでとまて待つ

恋　東西人

いく度もかよひなれてかへる人を通ひあれはあふ逢人のたよりを

老後恋

逢事よもあらそのつれなさはおもひしも我身とならめ

よしおいて後むかひ後つきなりける女は我やさしと此

さてそのよはあふて中かなひて後ほろほろと泣

ぞなくむかしひの年なよかく逢ともよ世なくきえ涙のあけつ

恋し

老の涙つゆふよるべもなき身ぞ我を恋ひ身もなくもはれる

おもふ人のかよふ法のそらしけれ
年ふりて返らぬものは黒髪のあかぬ助なる物とてや世の人
返し
胡銅鏡もさこそは見れてとめ鏡のうちにかくれぬ助も
わかるゝ人のかよふのみ五月五日あやめ草よりは
あらぬ草に身をくらつうしけれ
今宵しもやらであやめなる中にあらぬ助にかくれ
返し
引よせて
月にうつして移ろふまゝにあやめ草かゝる助とはしらで
遂夢逢恋乃心を
月をいれし水にうつりし我が中にてかくなるときこそ
祈仏恋
人こゝろかはるまじと祈りのこゝろ見むも恋のやまひやあやめ草のそれやは
雑
世中に思ひしことも年ふりて京にて位に住て
いつしか我も落居て何も墨染の三位六位
に備へ侍りし時内裏人に我ながら恨みしはの
ものとも
其の後も返し事はうれしこゝに我が歌をいひなしてまつる法
返し

嬉しさ哉それとさてなむおもひは達者の歌なれは後のよまてと
蔵人おりて次の日女房のかたへつかはしける
なかむやは逢雲井の月をなかめてもそのかみまてやよかむかしをと
返し
雲の上はさしも成かへくもあらしそへすむ月影もあはれとそ見る
地下より侍し時内よりを所哉たひくめされて
まゐりたりとて女房のかたへつかはしける
おなし衆の下吹風にふきかしあはれと谷のみれはみる秋なけれか
大内ちる護なかりし殿上ゆるされぬ事は哉とかなかりし
さとかへりさるに則妻ありて侍るに大宿直なる

家よりかく逢ひて侍るに月のあかくてまされけれは丹後
乃内侍の許へつかはしける
人まて逢ぬ大内山のやまもりは木のかくれてのこる月はみゆれ
返し
いにしへのみ月を思ひし昔そ殿上ゆるされて君か御代をあふいて
かくてたに思ふそ世をくめて蘭今の御代とき
殿上ゆるされて又逢てこそ逢つれよの此後の夜のまえて
つかへ中に中宮亮重家の朝臣の許へ侍つる
雨ふるに木陰にしかきも今はさらかくも月をとみゆる
返し

さよふけて本院に参りしにあかつきの月のあはれなる物ぞと

おもなの比皇后宮権大夫殿のかたちよりかしこ

かくいひ侍りしかば

此頃やおもひおこせて九重の雲井ながらに我やみえむ

返し

数ならぬ身にも待ちし播かど今宵の月は雲の上まで知られざりける

二代の御門に昇殿して侍りし時三位大進清輔

明ぼのの月よりまつりてくまもなし

立返る雲井の空にすむとても独沢べに鳴きし音をぞ忘れん

返し

九重の雲ゐの霞へだつるは我のみ身こそ忘れやはする

蓮花王院の執行静賢あつかりしによみつかはし

つかはしけるとて

本院はわがすみし月を雲井にてながめし人はいかにみるらん

返し

君が代に何歌よむと此夜までの雲の上までなれし月ゆへ

右少弁親宗あそんの比殿中侍りしとて

花月の光さしそふ雲井には澄まるるものを人はかはらじ

返し

長き夜に出でつる月影よそにつく雲の上こそすみまさりけれ

殿下乃加階して侍りし時右馬権頭隆信かもとへ
しるしよろこひいひつかはすとて
和歌の浦にこのかきのほりし浪乃音まてわか身も嬉しかりけり
返し
いかにしてこのかきさへにゆるされしそのよしはなる和哥の浦風
加階の後かくて殿上清のうちまつりまうさるる事
ても猶さへ資隆のもとより殿上清のうちにとて
位山乃ほりゆきてもうれしき雲乃うへまてゆかむ猶もはるは
返し
麓さへひさしくつかへの位山雲路なからもいかにみなれし舞

同しころひの時中宮の大盤所よりとて
くらゐ山のほるく嬉しく今はやはらいて雲井まてあかれ嬉しき
返し
乃かにまよ位の山も雲乃上をまれれなりにしはなふかし
殿上乃まかりきて女房大輔かもとよりよ殿
こひつかはすとて
しほよる袖もいかまの嬉しさにつつみもあへすあまる衣
返し
袂せまくたちつかへける道すからうれしさつつむ袖の狭さよ
なとおもしろく殿あかりてひしてはきし比三位大進

清輔朝臣かくよめり

いにしへのかけし袂もせはからむ雲井にかゝる露の毛ゝれ

返し

和歌の道も雲ゐの成ぬ侍たつの立乃ほまてに見え

昇殿の時ことさへつれよりも悦喜歎ともはかるゝ

前大納言實定のもとへいひつかはし

ける歌にてよめり

雲の上にたちかへりぬる鶴おもひぬるも雁よそよまし

返し

雲井には千世まてちよまて舞ふへき露にすきへはま物とおもへん

祝言のついてよとおもひ出られてとそきこえ

よまれ侍りける

昇殿をみし秋の月のかくれ侍る雲井をそ哀にみる

返し

おくれても我も秋の月を別行も雲の上にあはれ見るかな

年の内に三位の上下にして正月に四位をたまはる

侍る頃ひとつゝ給ふ中宮亮重家

あまた衣をかさねてむかしの今一しかや思ひて嬉しき

返し

重ねてし袖よりも嬉しさは我業のそはなへてまさるらむ

昇殿の後四位して侍りし時亮君殿所によろこ
ひ申つかはすとて
おなじくは雲井よりかゝる若竹の星の位もならぶ世をみん
返し
みえにし星の位も雲の上にのぼる世のあるべしとは
誰しもかくてさし重なる五節出して
いふかしき殿中の清水に出て忘られぬる文成ぬる舞
すなはち誰しもおもひて女の忘られにしそのかみ心を
小別当入道大谷に侍りけるにおもひしやみやみ
しそめし所にてありしよりかは嘆りてつかはしける

浅からし殿中の忘れ事はへい文家集つくることおもひ
女院百日の御懺法のをりに信乃布施にたち
はべりけるにおなじ人にまゐらせけるに
はかなくもとにまいらざりしてつかはしける中に
中宮亮大進重家に侍りたるころ琵琶をみら
侍りけるはつかはしたる返事をせんとしける
白河にて紅葉のちりのこる水をおもひて心のみえける物を
返し
はかなくもあはぬをなげく心ひかへ水まよふやもまどふらん
是は伊勢の殷富門院中将の山荘によせたりし

かゝる君すみつきたりけるにすみなれたるおもひ出事
よみたりけるにや
さしめてあひみる世に宵月弥月の日子日乃
松枝つみたるとて
夏よりは君と杉の日の松をこそ雲にたゆるまで人もひくらめ
別当入道大谷にかくれ住むと正月十日ばかりに
まゐりたりしに松に藤の花咲てかはりて持参し
藤の花をしてはいつまでも後の世のしるしなる
松に千歳のこゝろやまちてはちる花のいろなるかな物也
返し

藤の花つけてきこえむもとも谷の松千歳ときこえて世の歌
従下なる秦歌侍りけるよみたる
松かひきみる雲の上までもかぎりなき世にもあらん物とは
述懐歌類従吉歌合
いたつらに年をつもりし涙よ生る松の枝あるのたのひ世なる
別当入道大谷もて人のよかにかくれて生すまよる歌とて
きてうちこしをおもひしみにおくすることを
世を有て誰ともなきこの身をとさきに世侍るのし
おほ河谷の思ひ出る露も世に[illegible]にすむ由をと
すみつる人の事はかくて猶へてかれつつのかた[illegible]

あつまへたる山ゝ遠き山の麓のおもふことありてもぬれにけん

返し

こゝろあるとしもかへん山庵のむかしにかへらぬの心とも猶きこゆ

ほかしいまの人をもひつゝくおもひはれぬるなど

ゐまもほつてゝ待事なむ

いろくまてひめいむおもはぬ家に渡る露のなをこそ

別当入道てもあらで侍らぬにかくもなくて

よまけるもとのねまて植へて侍山里に入ひしを

いりくおもむきにて侍りなきのみ

すけよしもとへまゐるものとひおる人のこゝろおとのまゝしむ給

返し

すけよしなくて久しく遠く源歌にことばいろのまし

香胴院のよはせよりおひて侍所林苑すそ人く

懐旧といふ事をよみて侍りけるによみける

ほかしわすれぬをのみ人しもまちよるたゞ今や

寳荘厳院にまゐりてけるに梅のさかりて桃花

静賢小野宮枝をこひに侍けるにおくりて枝

元ありしゆかりのえんにもたるふる年にも花

梅もまた又こん年の春雨に梅の色まさりてふかくもあらむ

返し

冬もあをしや中すゝく深つ送へは橋ともろくに赤にみるへかき
年老たる人の五月十日比に高橋の名たるを
請けたる人れかう人清らに役そ打ちし出門の前にて
小呂有てつゝけける
植る花の咲まてあるへしと頼まぬ身に廣まする道
返し
あきするをに那なる道あるたち花を植る人の身にのみそへてそみる
小侍従あまり小路よけるに寄てつゝけける
我そ先出へきを死そ先にて無し思ふ事まてちる哉
うへし

をかしと其妻へ待なと小屋すら立ろを継ひ入けれは
帥中納言殿時々子に入を昇度を見せられける
よしなと申て
雲井まてみえ九れかる天川の川のみ舟もよるを道ある初雁
返し
引つ遣て雲井まての行方たなた行人の子は二に熊野を給ひてけされ
熊野に小はりのまつ遣る人なりけ道之かくれの糸
ましろうのや
少輔別當入道に宮にと中務の宮の私信給そと
さは吐かつけたる道何ゝかる道せ物ていまかいそあい

見てしのみ思ひきるかなよ上林苑にて人麿
の歌伝へ侍る日あはれにてみちかきむかしのち
拾へてつたひ侍りのこしける
春ふりてきて時過つる色てみよ我苑に後は侍
匂へし
忘くるな春の日過にし花を後は思ひそ思はる君はさらに
上達部あまた人またまた大内の花見る過侍るよ
二位大進清輔朝臣よるきてさ侍らりしをこそ
朝夕に笑過つ昔見し百敷や花の匂ひもあれ心みのちき
匂へし

別ぬる昔見し袖のうへにちる花あや露きかゝるらん
最勝光院の二位やあひまちつゝひて出家するよしききて
さくらひつゝ思ひそよみ侍る
二条きそ春より先なる月になれも君にも入るを過ぬる
匂へし
その里もにほへし風も過きてれていまは人なる花もちらん
同入る庭のかとよの里春のつゝ思ひて侍る紙
小虫見てきてるそる
やるかまて春水渡るさも過ぬる我あらはれもかきそもつ
匂へし

これ新ら波よせくる菱我目のなかりけるをとみえける

ある女のかたへ山端に月いらんとするを見て

扇と侍りければ

山のはに入なむとする月影を我よそにても惜まるゝかな

返し

千世までとおもひてみる月を山のはに入るともあかぬ

別当入道山里に侍りける所にまかりたりけるに

よるのひとつもなかりけるにあかつきまでさせて侍

て帰りまかりける故院乃小面乃東にてのぼる西影を

よしきりはらへしらるゝ

秋の夜の月やかたみとなりなん先だゝば

返し

世もかはり深きもあるとみるなる我もむかしの月を見るかな

太政入道素覚年ごろの事まで思ひ出て歎く

とかへりてよみて侍りければ

なにとなく月も名残にまさるらむ先だつ人のあとをしのびて

うへし

木の葉ちる露のなかにや残るらむとぞきくに月をみるかな

世の後をもおもふ人の世捨まで

九月廿日あまりのほど天王寺へ参りて侍

しゝ小伊賀入道為業がもとより申をくりて侍りける
かへしとゞめてつかはしたりし
春こそは猶よみをきし津の國の難波わたりの浦のけしきを
返し
心ある春隔れて二年にかすみわたれる浦の氣色をもみれ
又安房大輔がまいりけるにつくとゞめていひ
つかはしける
底清くむすぶ亀井の水すみて心の蓮をも見せてける
返し
我もむすぶ亀井の水にこそ心の海もすみまさりけれ

此事を伊賀入道きゝていひつかはしける
西の海に渡す心の月の影うつす井よりぞ難波の入ぬ
返し
西の心亀井をあとに西へ行月の舟にぞ我も棹さす
又是も同入道のもとへ津の國にあるころ
諸ともに沖つむ梅をつむ人に思ひよする所なるまゝ
へ
難波の浦見えそむ海士の舟寄するいまはたゞあつかる
この浅入道のかくとあはれみて晩にあひてはつかし
けふかゝる下てあはれ家所にこそ其そふ侍るを

教へを我はいかに〳〵かく此海の底をすみかとしてありけるぞと
とひし
かの答へけるは我もと人にて有し時は教への言をいかにとおもひ
おもふところなくて念仏申てそ我をまもらしめし給ひ
またひとつとしとしてあきら縛よりとき出しもて往生
入る事もあて奥よ入て秋門よ侍るをよたひなくして去
うつくしき云ひのうちに我門にひとしよみ侍るなと
我に云ひ出されけるを我のなかにて後へ人のよりよる歌
云くよみそはつくしける
一
むかしすくはせとめてある極楽のつとめにひとつに出たる事

云ひいつや様の事ありて法の言に耳をかたぶけて云事やありける
すみかのあるよりの松風をきゝて物のあはれをしりけり
是も歌に云くそれ一つ〳〵よりきて
琴のねをきゝしかは立出て我を世にうけたる心にて事の
ある人のきゝてしかうつゝにて申侍りけり
事を人によく心をふかくきゝてそのよき事の人の深き我
此くらゐて女房大輔
事につきて此世をすてて[illegible]
和歌によく人の心あはれにて秋をすてて今よりも連
前なるしてあはれにて[illegible]侍りけるなり

かなひくよみ遊られ松浦の里て人あまたくらう
あそひ侍るよしある京より乃女房二三人を
引物乃うちうまけすくて菩うく遊歌なとして
今よ乃里は花すまく知人もなかりしや中かすらひく
栗もやうく此方に松のしらる浦の里浦かみ
乃ち二三百年ありて一人のかりく人あつしるる
若よあひて浦のかよふ里青葉のをさまたる橋もとしそ乃
返し
我ないさ青もさうにあらる里のうちえ松浦姫を小共よ
一首遊女と侍て今新よりの乃女房さうらはるとは事

玉に浦くしる里てき文字を度さうしらひけ
遊ひおもふるよみて我ひか以もれるさとし
かくあるふるやすき乾をり松浦乃の座すふさあね我共ひれ
うへし
おわ侍てさ宿をゆるいすへをゆるひるるま人今は志へくさ
あひきは里て侍女もよこうかふそのあけるさのえへくせこ
あるさりけ遊ハ日数よつの里あみ日比小松なる
よろと申て松本にの名さう小人松つのりすとある中
津のくに侍る哉
あの松をは日々出るまにも姓をもけて皆くされわりも山水をもえも旅
如此

大夫公俊恵か坊にてかへるかりをよみ侍りし

教長乃かの侍しに坊にまかりたりけるにひつのはし

侍りし

月の夜たちて小野の園のほとりにあそひありきてたちより　覚

返し

主しらぬ心みつるも垣根なる梅やの月のゆくへも

南殿の花ゆへしのひけれは人よみきて後よりおくら

きと和入よめるにもちきりしに久しくもとつれて待

らさりしも後京月の廿日あまりのおなしよひ

侍りしよめる

おもひ出は八雲井の花をも待侍るとなれゆへなんこゝにかたらん

返し

あまた世にへて雲ゐの花のかたみにはちるをみるにもまさりき

長勝乃三位入道の月よみ人小殿乃まかりて

すみ殿の下よりも雨て乃水桟おもしつきたるに

まかりてみ侍りたしおもしろき風情ありてみて

しもとてもよりて梅のかきつらしよめる

すけもとかもり殿をみて袖を覚てもとのなる

返し

夏のよふかくよりおもふ殿の糸をと春のやまかまちやさは

あひしれる里て侍女房二月十日ほとに大宮よりと
申ふよしをおもていかつのよしける

春なきら梅の古山に入人のなかなか気なくて花をみしかな

返し

あつまちに花ちりつきぬるもかくら秋の山路出てよらな

如渡得船

彼岸我行つくやとまちつらんまつくよそうの法の一はある

人麿新後の前まて一品経供養し侍けるに

侍りし勧持品のこゝろを

まことあれ後は仏とおもふにも我もと頼むかひはある

化城喩品

かりそめのやとゝしやとるこゝろ衣の旅路まとゝのさとはちかし

たまさかにあひてやまかたひける女のもとへ

かれにける宿のつれなさ見ゆる身にこゝろとけむ

胡蝶のて風をきせまし降雪のふるえのあるさ身なれ

返し

外にあら今もまたこゝろのうき風の横越の舟に漕はなし

誰かれのあつしてゝ比大夫公任思つかと

よそにこひ侍りて侍りし女て

男をうめつはうらむすらん独寝のさゆる衣の袖の小鈴そ

返し

偲の花咲るも流はまし つゝ世あるは梅さ移りとさひやらかん

甲斐大進為基のもとより故郷大納言集をと

おもふつのらしかとよりしもちかひしも本意ならぬ

労あるまし人あらくかくせよ隠のうつらう

あはれなる浅茅か末の露をさへかゝる世ほとに落ちぬるかせな

返し

あはれ我かつは袖なるみをしれと歎き浅茅の露は落ちけり

為羽院に侍りし時若宮のかたより梅花を給ふ

まうして

みるかきりは梢の花咲ふ遠山霞む波の上かな

返し

なにはえのみかきの花なれや来てみる人もさそひてまし

敦頼入道西宮にて歌合し侍りしに海上眺望といふことをよめる

和田の海を霞にこめて遥かなる船の雲の絶えまに入ぬる

おなしく歌合に述懐をよめる

おほかたは神もあはれと思ひすてゝ知る我身を人のあはれは

祝といふ心を

常にみる松の木高く繁けれはかはらぬ神と我世のさかは

さて此うたハ侍りけるを女房の住ける所に
むかしこよひてあはれなり人まつるにさる日
世とともにわかみをまちくらしてあるかはひと
はなこひわすれて侍りけれは返事
一たひもわかみにかゝるをりもなくておもひつるかあはれなりき
返し
たまのをにかけてそおもふかへるうらとも あれは
たまをまつらくらしつゝや

群書類従巻第二百四十六下

国立公文書館
National Archives of Japan